

上天草市における釣りに着目した コンフリクトに関する研究

東家 正采¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学 工学部土木建築学科 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: 196t1205@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学准教授 大学院先端科学研究部 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp (Corresponding Author)

近年、釣りは人気なレジャーであり、地域資源を活用する手段としても用いられている。しかし、釣り人のマナーやルールが遵守されない事は慢性的な社会問題となっている。本研究は釣りに着目した港空間のコンフリクトの実態を明らかにすることを目的とした。そこで、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園において釣り人、漁業に携わる地域住民、漁業に携わらない地域住民の3つのステークホルダーに着目し、インタビュー調査と行動観察調査を行った。その結果、港空間は釣り人と地域住民が共存する場であり、それぞれの利用を妨げる行為によりコンフリクトが起きていることが明らかになった。

Key Words: blue tourism, conflict management, fishing, local rules

1. はじめに

(1) 研究の背景

我が国は、約7千の島々からなる島国である。その沿岸部には多くの漁村が存在しているが、急傾斜地や崖や山が迫る狭隘な土地に位置するものが高い割合を占めている。また、漁村は人口減少や高齢化による衰退が深刻化している。漁村では人々が住み漁業が健全に営まれることによって、多面的機能が果たされるが、漁村の活力が失われ衰退していくと、支障が出る可能性がある。

豊かな自然環境や文化を有する漁村では、豊富な地域資源を有している。水産庁では、これらを活用することが漁村の活性化に繋がると言われている¹⁾。しかし、漁村は外部からの訪問者に対して閉鎖的であり²⁾、受け入れ施設が不足が課題として挙げられる。これらの課題を解決すると活性化に繋がる集落が多く存在する。

漁村の活性化の手段として沿岸部で楽しめるレジャーの活用が挙げられ、その一つとして釣りに注目が集まっている。その人気は高く、コロナ禍において3つの密(密閉・密集・密接)を避けられるレジャーとして再注目されている。また、年間の平均消費額も比較的高額であることより、経済面での活性化が期待されている。国土交通省港湾局は、港湾を釣り施設として利活用し、地方創生の取り組みを実施している³⁾。本研究では、このよう

に港内で行うレジャーとしての竿釣りに着目する。

しかし、近年釣り人のごみのポイ捨て、違法駐車、立ち入り禁止区域エリア内への侵入などの迷惑行為や不注意による事故などは慢性的に社会問題として言及されている。本研究では、このような釣りに着目した、利用者間の相互理解を欠いたコンフリクトを研究対象とした。釣り人が釣り場として利用している港空間において、各利用者の利用行動や、これらに対する心理的な認識について分析する研究が必要であると考えた。

(2) 既往研究と研究の位置付け

釣り人の心理に関する研究は多く存在する。玉置ら⁴⁾は、遊漁者の背景に着目して溪流釣り場における禁漁区の解禁に対する遊漁者の支払意志額の傾向を明らかにした。鈴木ら⁵⁾は、「釣りガール」と呼ばれる女性の釣り人の心理に着目し、釣りガールの意識を調査し、釣りをしやすい環境整備や女性の釣り市場の持続可能性について考察した。しかし、これらの研究は釣り人のみの視点からの意識等を分析しており、釣りに関わる他主体の視点に対する言及はされていない。

また、公共空間におけるコンフリクトに着目した研究も行われている。笹尾ら⁶⁾は、快く思われない公共空間における利用形態の一つとしてスケートボードに着目し、文献調査やアンケート調査により、目撃者の意識から公

共空間での特定利用形態に対する寛容性について探索的に検討した。吉城ら⁷⁾は、近年社会問題となりつつある子どもの道遊びに着目し、Web アンケート調査により住区内道路における道遊びに対する地域住民の意識を分析した。その後、「子どもの道遊び」と「地域住民」の折り合いを見出すための考察を述べた。しかし、釣りに着目したコンフリクトを質的に分析した研究は少ない。

(3) 研究の特徴・目的

以上より、釣りに着目した公共空間の利用に対する心理作用及びコンフリクトを複数主体を対象に質的に分析する点を本研究の特徴とする。

本研究の目的は、釣りに着目した港空間におけるコンフリクトの実態を明らかにすることである。そのために港空間における利用を分析した。

(4) 研究の構成

本研究では、釣りに着目したコンフリクトに深く関わる地域住民、釣り人を対象とし、インタビュー調査、行動観察調査を行った。地域住民を対象にしたインタビュー調査で得られた発話データから、港空間の利用に着目したコンフリクトの空間分析を行った。その後、全ての対象者から得られた発話データから作成したステークホルダー図を用いたコンフリクトの分析を行った。

2. 上天草市における釣りの位置付け

本章では、上天草市における釣りの位置付けや研究対象地である岩谷漁港、野釜漁港、小島公園の特徴について整理した。

(1) 上天草市の地勢⁸⁾・特徴

上天草市は、熊本県の西部に位置しており(図-1) 、

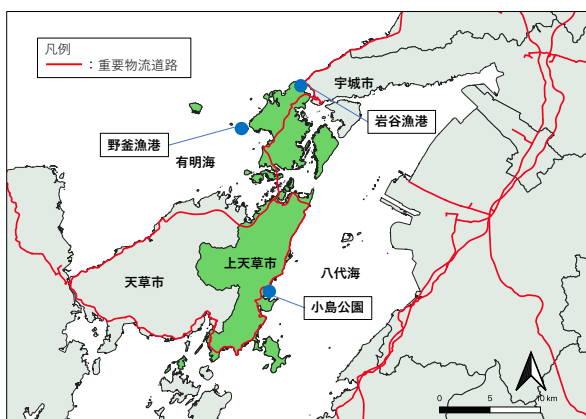


図-1 研究対象地の略図

天草の玄関口である。有明海と不知火海に面し、昭和31年に雲仙天草国立公園⁹⁾に指定された自然豊かな景勝地である。

そのため、多くの釣り客が訪れており、競技系の釣りの全国大会も行われるなど釣りが盛んな地域として有名である。また、上天草市には漁港は18港、港湾は3港(上天草港は10の港湾が統合)存在し¹⁰⁾¹¹⁾、熊本県内では天草市に次いで多いことや、九州本土からのアクセスも良いことより、上天草市は釣りをしやすい環境であることが分かる。行政の活動に着目すると、上天草市は令和3年10月に釣りに特化した地域おこし協力隊を採用し¹²⁾、釣りを軸としたブルーツーリズムの推進活動を行なっている。以上より、上天草市は釣りを活用した先進的な地域おこしが活発な自治体である。

(2) 研究対象地の特徴

a) 岩谷漁港

熊本県管理の港湾の三角港の一部であり、以下より通称の岩谷漁港とする。天門橋を渡り、約3kmのところにあるため、九州本土からのアクセスが比較的良く、近場で釣りが楽しめる場である。付近には公園があり、その中に公衆トイレも設置されている。また、荷揚げのための車両などが乗り入れできるコンクリート製の浮棧橋や、船の係留のために防波堤に設置された木製の浮棧橋などがある。このように港湾の一部であるが、漁業利用が強い港である。一方、係留してある船は岩谷地区に住む漁師だけでなく、趣味で船を持つ岩谷地区の住民や上天草市外在住者も係留している。

b) 野釜漁港

上天草市が管理する第1種漁港である。係留されている船の所有者は漁師が主となるが、趣味で持つ者や遊漁船業者、養殖業者なども存在し、港内には荷上げ場となる場所や、木製の浮棧橋や併設された生簀などがある。付近に公衆トイレは無いが、旅館や漁港内に隣接したコテージなどもあり、釣り客だけでなく他の施設の利用客も訪れる場である。

c) 小島公園

熊本県管轄の港湾である姫戸港に併設している。小島と呼ばれる陸繋島は、砂州の部分コンクリートで補強し、潮の満ち引きに関わらず通れるようになっている。小島には、上天草市の指定管理者制度により運営されているキャンプ場だけでなく、神社、姫戸町のシンボルトワー、トイレ、ベンチなどが設置されている。漁師の船が係留されている浮棧橋は、柵が設置されており、姫戸漁協組合によって組員以外の立ち入り及び魚釣りが禁止されている。

3. 港空間における調査結果

本章では、釣りに関するコンフリクトに深い関係を持つ釣り人、漁業に携わる地域住民、漁業に携わらない地域住民を対象とし、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園で行った調査の結果を整理した。

(1) 調査概要

本節では地域住民を対象としたインタビュー調査と釣り人を対象としたインタビュー調査、行動観察調査の概要を示した。

a) 地域住民を対象としたインタビュー調査

地域住民から見た港空間でのコンフリクトの実態を明らかにするために、半構造化インタビューを行った。漁業に携わる地域住民は港空間で生業を営んでおり、漁業に携わらない地域住民とは港空間での問題への関わり方が異なると考えた。そのため、漁業に携わる地域住民と、漁業に携わらない地域住民の両方を対象者とし、調査を行った。以下の表-1に調査対象者と調査日時を示した。

また、地域住民は港の付近に居住しているため、港空間は生活に密接に関係した場所であると考えた。そのため、釣りに関する問題への考えだけでなく、普段の利用についても調査する必要があると考えた。以上より、下記の4つの質問項目で調査を行った。

- 質問1. 普段の港の利用方法
- 質問2. あなたが感じている港の中の問題
- 質問3. 他の利用者との関わり
- 質問4. 港の中で入ったり釣りをして欲しくない場所

b) 釣り人を対象としたインタビュー調査

釣り人から見た港空間のコンフリクトの実態を明らかにするために各対象地に居た釣り人を対象としたインタビュー調査を行った。釣り人が釣り場にいる時にしか感じるできないことを調査するために、事前にアポイントメントを取らずに現地で行った。以上の調査手法を選定したことや、調査対象者は釣りというレジャーを楽しんでいる最中の調査であることを考慮し、比較的長い時間を要する調査は不可能であると判断した。そのため、5分程度を目安に属性と対象者が感じている問題のみを聞く構造化インタビューを行った。

表-1 調査対象者の属性と調査日時

性別	年齢	出身	居住年数	所属	調査日	時間(分)
A	男	60代	岩谷	67年 区長 漁業関係者	2022/10/22 11:00~	76
B	男	70代	岩谷	70年 地域住民	2022/12/21 11:00~	55
C	男	70代	野釜	70年 区長 漁業関係者	2022/10/13 14:00~	64
D	女	70代	野釜	70年 地域住民	2022/12/18 11:00~	31
E	女	70代	野釜	66年 地域住民	2022/12/18 13:00~	37
F	女	60代	芦北	35年 地域住民	2022/12/18 14:00~	38
G	女	70代	野釜	50年 地域住民 漁業関係者	2022/12/18 15:00~	25
H	男	60代	姫戸	63年 地域住民 漁業関係者	2022/11/26 11:00~	38
I	男	60代	姫戸	31年 地域住民	2022/10/22 15:00~	36
J	男	70代	姫戸	50年 地域住民	2022/10/26 15:00~	43

インタビューの成功率を上げるために釣り業界で釣れやすいとされる日没前後30分の時間帯を避け、対象者が準備や片付けをしている時に依頼し、調査を行った。

c) 釣り人を対象とした行動観察調査

釣り人の港空間利用を明らかにするために釣り人を対象とした行動観察調査を行った。釣り業界で一般的に釣れやすいと言われている時間帯である日没前後30分の計1時間で調査を行った。調査は釣り人の行動を俯瞰的に把握できる場所から行い、釣り人が駐車、釣りをした場所を記録した。調査日時などは表-2に示した。

(2) 調査結果

a) 地域住民を対象としたインタビュー調査

調査で得られた音声データは全てICレコーダーで録音し、計443分の音声データを得た。全て文字起こしを行い、計99,281文字のテキストデータを得た。以下の図-2に調査対象者の発話量割合、図-2に各質問項目に対する発話量割合を示した。これらの発話量割合に偏りが生じたのは、普段の生活など個人の背景により、釣りに関するコンフリクトとの関わり具合が異なるからであると考えられる。また、発話の強調部や傾向を見るテキストマイニングのような量的な分析より、自身がインタビューとして感じたインタビューの息遣いや仕草など話し方を元に発話内容を質的に分析していく方が有効であると考えた。

b) 釣り人を対象としたインタビュー調査

調査対象地に居た14組、21人の釣り人に対し依頼したが、8組、12人にしかインタビューを行うことができなかった。インタビューを行うことができた釣り人の概要と日時は以下の表-3に示した。調査で得られた音声デー

表-2 行動観察調査時の概要

対象地	日時	天気	潮	日没時刻
岩谷漁港	2023/1/14 17:05~18:05	曇り	小潮	17:34
野釜漁港	2023/1/15 17:05~18:05	曇り	小潮	17:34
小島公園	2022/12/10 16:45~17:45	曇り	大潮	17:13

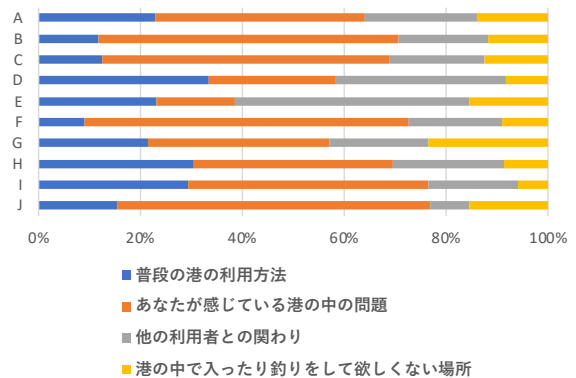


図-2 各質問項目に対する発話量の割合

タは全てICレコーダーで録音し、計24分の音声データを得た。調査で得られたデータを整理し、結果を以下の表4に示した。

c) 釣り人を対象とした行動観察調査の結果

防波堤や浮棧橋などを中心に海にせり出した部分で釣りをしている人が多く見られた。釣り人の中には多くの荷物を釣りをする場所まで運ぶ人もよく見られ、釣りをする場所から近い場所に駐車をする傾向があることがわかった。

(3) 地域住民同士の関係

どの地区にも隣保班と呼ばれる組織が存在し、多くの地域住民は定期的に地区内の清掃活動を行っていた。また、日常的に獲れた魚や野菜などを物々交換したりするなど、地域住民の間では深い交流が行われていた。対象者の多くは幼少期から同じ地区で生活しており、互いに知る存在だったため、強いコミュニティが形成されていたことが分かった。

(4) まとめ

本章では岩谷漁港、野釜漁港、小島公園の釣り人と地域住民を対象に行った調査の概要と結果を示した。

地域住民に対してインタビュー調査を行った。その結果、地域住民は同じ地区に住んでいても個人の背景や属性は様々であり、コンフリクトについての発話は個人や対象地により異なることが分かった。

釣り人に対してはインタビュー調査と行動観察調査を行った。その結果、どの対象地においても近い問題として挙げられたことや、釣り人はどの対象地においても駐車や釣りなどの一連の決まった行動を自身が釣りをしやすいような場所で行っていることが分かった。

以上より地域住民は港空間を個人や対象地によって異なる視点で見ていることがわかり、釣り人はどの対象地においても同じ視点を持ち、釣り場として見ているという視座を得ることができた。

4. 港空間で起きたコンフリクトの活動分析

インタビュー調査により、地域住民は対象地や立場によって問題に対する発話に違いがみられた。そこで、本章では問題に対する評価に着目して発話データの分析を行った。また、地図にプロットすることでコンフリクトを利用者の利用形態などを踏まえ、空間的に分析した。

(1) 分析の視点

調査対象者が問題だと感じている発話を抽出し、問題に対する評価に着目して分析を行う。手順を図-3に示した。その後評価、評価の対象、場所、評価の視点に分けて整理した。図-3の例では、コテージで起きている問題について指摘している。「宿泊客の騒音」という対象に、「うるさい」という評価をした。評価の視点は、コテージの隣に住む調査対象者自身が感じている問題と考えられるため、「自身」とした。

このような整理を岩谷漁港、野釜漁港、小島公園で得られた発話を整理し、次節に結果を示した。その後、得られたデータをそれぞれ地図にプロットした(図-4, 図-5, 図-6)。

表-3 調査した釣り人の概要と日時

組	人	年齢	性別	居住地	釣り歴	日時	
①	a	68歳	男	熊本市	40年	2022/12/10 15:00~15:30	
	b	66歳	女	熊本市	10年		
②	c	36歳	男	熊本市	1ヶ月		
③	d	53歳	男	熊本市	30年		
	e	50歳	女	熊本市	30年		
④	f	55歳	男	山鹿市	50年		
	g	29歳	男	植木町	5年		
⑤	h	36歳	男	熊本市	30年		2023/1/14 15:00~15:30
	i	27歳	男	熊本市	20年		
⑥	j	23歳	男	菊地市	15年		
⑦	k	40歳	男	宇土市	6年	2023/1/15 15:00~15:30	
⑧	l	20歳	男	熊本市	2年		

表-4 釣り人が指摘した問題

組	人	指摘した問題
①	a	・タバコや釣り針などのゴミが放置され危険であること
	b	・女性にとってトイレが無いこと
②	c	・釣り針などのゴミの放置されていること
③	d	・釣り針などのゴミの放置され危険であること
	e	・釣り針などのゴミの放置され危険であること
④	f	・釣り人同士の一定の距離を守らない釣り人がいること ・大きな声で騒いだり、走り回ったりする釣り人がいること
	g	・釣り人同士の一定の距離を守らない釣り人がいること ・大きな声で騒いだり、走り回ったりする釣り人がいること
⑤	h	・ゴミが放置されていること
⑥	i	・釣り人同士の一定の距離を守らない釣り人がいること
⑦	j	・ゴミが放置されていること
⑦	k	・他の釣り人によるゴミの放置などの問題で釣りが禁止になること
⑧	l	・釣り人同士の一定の距離を守らない釣り人がいること

だって民家だったから(コテージと)結局自分の家がかっついでる
場所 評価の視点
 んですよ。その宿泊客の音楽の音量とはもう何かこのコンサ-
対象
 トでもやってるのこなってくらいうるさかったんですよ、
評価

場所	対象	評価	視点
コテージ	宿泊客の騒音	うるさい	自身

図-3 整理の手順

(2) 岩谷漁港におけるコンフリクトの空間分析

岩谷漁港において地域住民から得られた問題だと感じていることに関する発話を整理、分析した。本節では、コンフリクトを地図にプロットすることで空間分析を行った(図4)。その結果、以下のような場所でコンフリクトが起こっていることが分かった。

a) 防波堤

A氏はここで、撒き餌等の釣り餌が捨てられることによって悪臭が漂い、民家の方に風で悪臭が飛んでいくことに対して、「窓を開けられない。」と述べた。夏季に風で涼むことが出来なくなり、日常生活に支障をきたす問題であると捉えていた。

B氏も同様に指摘し、捨てられた釣り餌が地面で固まり、「掃除もできない。」と述べ、この問題を解決することができないと感じていることが読み取れた。また、B氏の自宅と防波堤は近接しているため、夜中や朝方の釣り人の話し声などの騒音は睡眠の妨げになると捉えていた。これらの問題に対してB氏は直接注意しに行くと、逆上する人も居たため、釣り人に謝りながら注意しなければならないことを話した。

b) 電線

A氏は釣り人が仕掛けを投げる際に電線に絡まり電線が破損することを指摘した。破損した電線は区長であるA氏を筆頭に地区の住民で修理をする習慣があるため、この問題に対し「住民が一番困る。」と述べた。

B氏も同様に、電線に釣り糸が絡まることを指摘した。これに対しB氏は、「しょうがない」「どうしようもない」と、一定の寛容性とこの問題の解決を諦めていると読み取れる評価をした。

c) 道路横の港湾課用地

民家に近く、多くの地域住民は日常的に駐車や散歩で通過する場である。A氏は、ここで釣り人の駐車利用が多いと述べたが、日常生活の妨げになるとは捉えていなかった。B氏も同様に釣り人による駐車利用に対して言及した。駐車自体に対しては「自分の土地では無いか

ら。」と述べ、許容を示した。しかし、漁港の北部に位置する防波堤付近は、幅員が狭くなっており、緊急車両やゴミ収集車の通行やUターンの妨げとなる可能性がある。そのため、駐車禁止の看板も設置してあるが、それでも駐車する釣り人が多いことを問題と捉えていた。また、B氏は近くに住んでいるため、深夜や早朝のエンジン音やドアの開閉音が睡眠の妨げになることを問題だと捉えていた。

d) コンクリート製浮棧橋

船の係留や荷揚げの際に利用されており、自動車も乗り入れできるような大きな浮棧橋である。B氏は、ここで釣り餌や屋外排泄により浮棧橋上が汚されることを指摘した。B氏はマナーやルールが守られない状況が続いていることと、本来の用途を考慮し「本当は釣りをやめてほしい。」と述べたが、「しょうがない」「言えない」と許容と解決を諦めていると読み取れる評価をした。

e) 木製浮棧橋

防波堤に併設する形で、より多くの船を係留させるための施設である。A氏は、夜間に船内に侵入し、漁具を荒らされたことや生簀に活かしておいた魚を盗まれたことを指摘した。

B氏も同様のことを指摘した。また、過去に自身の船の船外機を盗まれたことを指摘した。

これらを踏まえ現在は、浮棧橋に船舶を係留している者しか入れないように柵を設けてあり、部外者は立ち入り禁止になっている。

f) 係留用ロープ

A氏とB氏は、ここで釣り針や釣り糸が引っ掛かることを指摘した。これに対し、「嫌だけど、困るのは自分達だけん。」「責任負わずわけにはいかんし。」と述べており、この問題の解決を諦めていると読み取れる評価をした。

g) 民家の間

A氏は釣り人による屋外排泄に対して指摘し、釣り人は夜間、人目の付かない場所で排泄していると述べた。公衆トイレは漁港の南側に位置しているが、夜間は電灯が付かない。そのため、夜間に釣り人が漁港内の北側に集中することが屋外排泄を誘発していると話した。しかし、A氏は「入るとは別によかとよ。」と述べ、釣り人の通行に対しては許容を示しているが屋外排泄のみに対して問題と感じていると考えられる。

B氏も同様に屋外排泄を問題として指摘した。民家の間の細い路地は、主に斜面の上の住民が日常的に通過するため、住民が掃除をしなければならないと述べた。

(3) 野釜漁港におけるコンフリクトの空間分析

野釜漁港において地域住民から得られた問題だと感じていることに関する発話を整理、分析した。本節では、

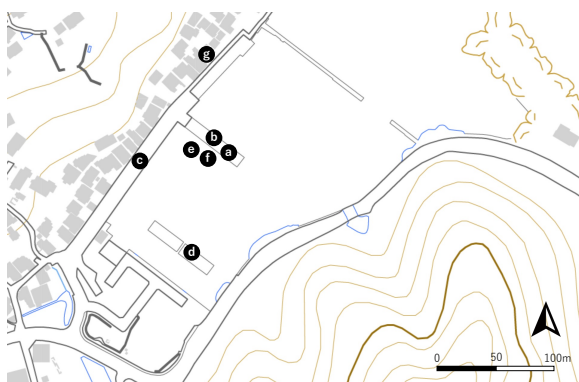


図4 岩谷漁港におけるコンフリクト

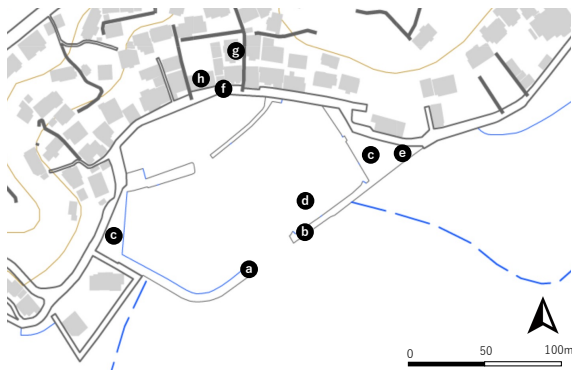


図-5 野釜漁港におけるコンフリクト

コンフリクトを地図にプロットすることで空間分析を行った(図-5)。その結果、以下のような場所でコンフリクトが起こっていることが分かった。

a) 防波堤

C氏, D氏, F氏, G氏は, ごみのポイ捨ての対して指摘した。C氏は, ポイ捨てされたごみは野生動物が食い荒らすため, 「住民は大変な思いをするんですよ。」と述べた。また, C氏は区長として日常的に地区内の掃除を率先して行っており, ごみを拾いに行く際にごみが多く落ちていると「気が滅入る。」と述べた。一方, F氏は普段通る場所では無いため, 「上の空で(中略)あまり気に掛けていないんですよ。」と述べ, 問題に対して認識していなかった。

また, C氏とD氏は釣り人が防波堤から落下することも問題と指摘した。南側の防波堤は石垣で作られており, 潮が引いた時は石製の基礎が剥き出しになる。そのため, 天端から防波堤の外側に落下すると大怪我に繋がる可能性がある。実際にC氏は, 過去には落下事故が起こり, 救急車が来たことがあったと述べ, 釣り人が天端でふらつく様子に心配するような発話が得られた。

b) 電線

C氏は, 釣り人が仕掛けを投げる際に誤って釣り糸を引っ掛けてしまい, それを取ろうとして引っ張ることで電線を破損させてしまうことを指摘した。C氏は区長として破損した電線の修理を発注しなければならないため, 「修理が大変」「修理代が高い」と評価した。

c) 駐車場(荷揚げ場)

C氏は, 釣り人の駐車場利用を指摘した。野釜漁港では遊漁船業や養殖業が営まれているので, 東側の駐車場は釣り人だけでなく, 遊漁船の利用客や養殖業が荷揚げ場として駐車している。C氏は遊漁船利用客に対して駐車場を無料で開放しており, 「大目に見る」と許容している。しかし, 来訪者が器物を損壊した場合やトラブルが起こった場合なども, 地区が損害を負わなければならない現状を嘆いていた。

G氏は荷揚げ場であるという認識を示し「自分の土地じゃないからお互いに譲り合いをすべき」と述べた。西側の駐車場は住民が駐車場として利用しており, D氏は釣り人がこの場所に駐車することに関して, 周りの住民が普段駐車している場所に駐車できないので「住民側が遠慮している」と述べた。F氏とG氏は, 日常的にごみのポイ捨てが起こっていることを指摘した。

d) 浮棧橋

C氏とG氏は浮棧橋に侵入され, 船内の漁具や生簀に生かしておいた魚が盗難されることについて指摘した。野釜漁港では, C氏を含めた漁師が木製の浮棧橋を作っており, 周辺には漁網などの漁具や漁船を係留する漁業のための施設である。そのため, 漁師であるC氏と漁師を夫に持つG氏は部外者が浮棧橋に侵入することは漁業に支障をきたす恐れがあり, 問題として指摘した。

e) ごみステーション

C氏は, 地区外からの来訪者が無断でごみステーションにごみを分別せずに利用することを指摘した。ごみステーションは地区内の住民がごみを捨てるための施設であり, 外部からの一部の来訪者が利用できる施設ではない。しかし, 地区外からの来訪者が分別もせず利用し, それを区長として自身が処理せねばならないことに対して「ひどい」「気が滅入る」と評価した。

G氏は, 日常的に漁港内で落ちているごみを見つけた際に拾ってごみステーションに捨てるようにしている。しかし, 収集車が分別されずに捨てられたごみや町の指定のごみ袋に入っていないごみは回収してくれないため, 落ちているごみを処理をできないことに対し, 「どうしようもない」と述べ, ジレンマを抱えた評価をした。

f) 道路

E氏は, 道路沿いに自宅を持ち自家用車の駐車場所として利用している。E氏は, 釣り人が東側駐車場に駐車する際, 道路にはみ出して駐車したことに対し, 「多分それは釣り人の人だわ。よその人だと思うんですよ。わあもう危ない。」と述べ, 自身が運転する自動車の通行や駐車邪魔になることを指摘した。

g) 港内

F氏は, 船のエンジン音について「音がずっと気になってたですね。」と述べ指摘した。しかし, F氏は野釜出身では無い自身のみが感じている問題だと述べ, 他の調査対象者からも指摘されなかったことから, この環境で育った住民にとっては当たり前のことであり問題として捉えていないと考えられる。

h) コテージ

F氏はコテージの付近の自宅に住んでおり, 「仕事から帰ってきたらすごい, 音楽の音量がもう何かこのコンサートでもやってるのかなってくらいうるさかったんですよ。」と述べ, 宿泊客の騒音を指摘した。

(4) 小島公園におけるコンフリクトの空間分析

小島公園において地域住民から得られた問題だと感じていることに関する発話を整理、分析した。本節では、コンフリクトを地図にプロットすることで空間分析を行った(図-6)。その結果、以下のような場所でコンフリクトが起こっていることが分かった。

a) 防波堤

H氏, I氏, J氏は釣りに関連するごみのポイ捨てに対し指摘した。I氏は釣り人が釣った魚を野良猫に食べさせることで餌付けのような状態になり、食べカスが悪臭を放つことを指摘した。また、海沿いの集落は夏季に家の窓を開けて網戸にし、涼むために海風を取り込む習慣がある。そのためJ氏は、撒き餌などの釣り餌の悪臭が風に乗って集落に飛んでくることで、家の中にも悪臭に悩まされ生活に支障をきたしていることを指摘した。

しかし、「来た時より綺麗にしてもらえたら、いいんだけど」と述べ、マナーが守られれば釣りをすることにに関して問題では無いと考えていることが読み取れる。

また、I氏は子供の来訪者が防波堤上に乗ることに對し、「危ないなって思いますよね。心配ですね。」と述べ落下の危険に対する心配をした。

b) 防波堤の電線

H氏は、釣り人が釣り糸などの仕掛けを電線に誤って引っ掛けてしまい、それによって電線が切れてしまうことを指摘した。防波堤の電線は、夜間に点灯する2箇所の電灯に電気を供給しており、漁師は暗い時間帯に帰港する際にこの電灯で防波堤の位置を把握する。そのため、電線が破損してしまい電灯が付かなくなってしまうと船が防波堤に衝突し、事故に繋がる可能性があることを述べた。また、過去に姫戸港では事故が起こってしまったこともあったため、電線には注意が向けられており、H氏は「事故になるけん。」と仕事の妨げになることを述べた。

I氏も釣り糸が誤って引っかかった電線のことについて認識していた。しかし、電線の故障がI氏の生活に支障をきたす直接的な要因にはなっていないため、故障については認識していなかった。

c) 小島公園駐車場

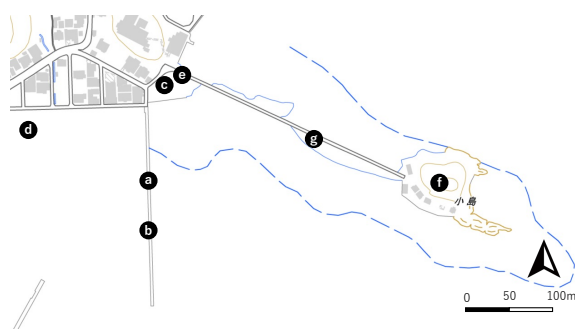


図-6 小島公園におけるコンフリクト

H氏, I氏, J氏は共通して屋外排泄と騒音に対して指摘した。H氏とI氏は、周辺の住民からの苦情として指摘した。J氏は、子供の釣り人の屋外排泄は「しょうがない」としつつも、保護者が後始末をしていかないことについて「ハエもすぐ来る。」と述べ、問題と指摘した。また、夜間や早朝に集まることについては許容を示しつつも、夏季に窓を開ける習慣があるため、騒音について「うるさいのは特にですね。」と述べ、この特に問題であると捉えていることが読み取れた。

I氏はごみのポイ捨てに対しても指摘した。I氏を含めた多くの住民は日常的に小島の方へ散歩をしている。その際に、この場所を通過していくためポイ捨てされたごみをよく目にしており、問題と指摘した。

d) 浮棧橋

H氏は、漁師仲間が浮棧橋に併設した生簀に活かしておいた魚を頻りに盗難されていたことを指摘した。そのため現在は、漁業関係者以外立ち入り禁止になり、柵が設置されている。

J氏は、その立ち入り禁止になっている浮棧橋に入ってくる釣り人がいることを指摘した。自身はこれによって直接被害を被っていないが、決められたルールを守らないことに問題と指摘した。

e) 自動販売機に併設するごみ箱

H氏とI氏は、来訪者が生ごみも捨てることについて指摘した。自動販売機に併設するごみ箱は、ペットボトルや空き缶などしか捨てることができないが、来訪者が生ごみも捨ててしまう。H氏は、それを野生動物が食い荒らし、風でゴミが舞うことで散らかってしまうことを指摘した。I氏が、ごみは週に2回しか収集されないため生ごみの臭いで周辺の住民が困っていることを指摘した。

f) 小島

H氏とI氏はキャンプ客がキャンプ場の指定箇所以外にテントを設置したり、駐車したりするなどのルールを守らないことを問題と指摘した。H氏やI氏を含めた多くの住民は小島を散歩コースとして利用し、このような状況を目にする機会が多いため問題として指摘した。

J氏は、キャンプ場での騒音自体は集落と離れているため、住民は気にならないが、その騒音によって飼い犬が吠えてしまい連鎖的に他の飼い犬も吠え出してしまうことで集落全体が騒がしくなってしまうことを他の住民からの苦情として指摘した。

g) 小島公園までの道

H氏は、釣り人が釣り針や釣り糸などの釣りごみを片付けないことを指摘した。釣り針は小さく目立たないため、放置されると危険で怪我に繋がる可能性があるため、「もっと片付けて欲しい」「危ない」と評価した。

I氏は、釣り人が多く集まる状況に住民が通りづらくなることについて指摘した。I氏も含めた多くの住民の

散歩コースとして利用しているが、両側が海で挟まれた狭い道なので、釣り人が多くなりすぎると散歩をする際に通れなくなることを問題として話した。また、I氏は釣り人が挨拶をしないことも指摘した。散歩をする際に、I氏が釣り人に挨拶をしても返事が無い場合があることに、「気分が下がる」と評価をした。

(5) まとめ

本章では、地域住民が問題だと感じていることについて評価に着目し、空間分析を行った。

その結果、どの対象地においても、釣り人の行動範囲と地域住民の生活空間が重なる場所でコンフリクトが起きていることが分かった。岩谷漁港では比較的漁業利用が強く、釣り人の行動範囲は集落からの距離が近いことから、日常生活に支障をきたし深刻だと捉えている問題が多く起こっていた。野釜漁港では、比較的漁業利用が強く、防波堤や荷揚げ場など、漁業において重要な場所でコンフリクトが多く起こっていた。小島公園では、漁業利用は強くないが、港湾として比較的大きな防波堤を持ち、その利用目的も他の対象地とは異なっていたため、指摘される問題も他の対象地と異なっていた。

また、同じ対象地でも対象者により普段の利用に仕方個人差があることが分かり、それにより指摘された問題や、問題に対する評価の度合い、許容度が異なることが分かった。

コンフリクトが起きていることが分かった。

b) 野釜漁港のコンフリクト

C氏はマナーの悪い釣り人による、ごみのポイ捨てとそれを野生動物が食い荒らすこと、電線の破壊、浮棧橋への侵入、窃盗、釣り人が防波堤から落下する危険があることを問題と指摘した。

D氏、E氏、F氏はマナーの悪い釣り人によるごみのポイ捨てと駐車場利用による養殖業者や住民の通行、駐車場の妨げ、釣り人が防波堤からの落下する危険を問題と指摘した。また、F氏はコテージ利用客による騒音と船舶所有者のエンジン音を問題と指摘した。

G氏は、マナーの悪い釣り人によるごみのポイ捨て、浮棧橋への侵入、窃盗を問題と指摘した。

釣り人同士では、ごみのポイ捨てなどにより釣り人の地位が下がること、釣りが禁止になってしまうことなどを問題と指摘した。

以上より野釜漁港周辺の地域住民であるC氏、D氏、E氏、F氏、G氏がマナーの悪い釣り人やコテージ利用客に向けて問題の指摘をしたコンフリクトと船舶所有者に向けて問題の指摘をしたコンフリクトが起きている。また、釣り人の間でマナーの悪い釣り人に向けて問題の指摘をしたコンフリクトが起きていることが分かった。

c) 小島公園のコンフリクト

H氏はマナーの悪い釣り人の釣り餌や釣具のポイ捨てによる悪臭や怪我の危険性、屋外排泄による悪臭の問題

5. コンフリクトに関するステークホルダー分析

本章では港空間で起きているコンフリクトに関係するステークホルダーを以下の図-7、図-8、図-9で整理し、ステークホルダー間でのコンフリクトを分析した。

(1) ステークホルダー分析

a) 岩谷漁港のコンフリクト

A氏はマナーの悪い一部の釣り人による釣り餌などのごみのポイ捨てや屋外排泄による悪臭、浮棧橋への侵入、窃盗などの問題を指摘した。

B氏は、マナーの悪い一部の釣り人の騒音、釣り餌などのごみのポイ捨てや屋外排泄による悪臭、処理、浮棧橋への侵入、窃盗などの問題を指摘した。

釣り人同士ではマナーの悪い釣り人に対し、隣の釣り人との距離が近すぎることで、ごみのポイ捨てなどを問題として指摘した。

以上より、岩谷漁港周辺の地域住民であるA氏、B氏から釣り人に向けて問題の指摘したコンフリクトと釣り人の間でマナーの悪い釣り人に向けて問題の指摘をした

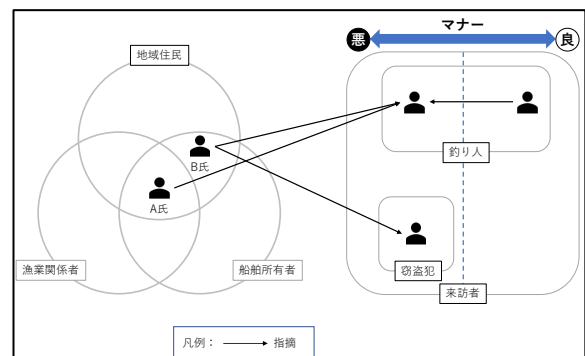


図-7 岩谷漁港のステークホルダー図

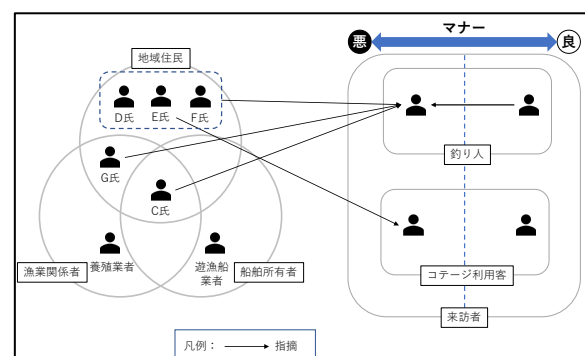


図-8 野釜漁港のステークホルダー図

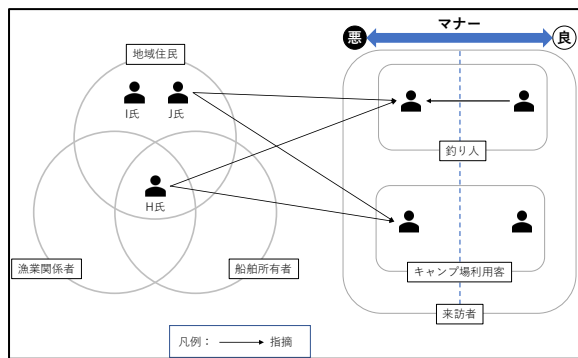


図-9 小島公園のステークホルダー図

を指摘した。キャンプ場利用客にテント設置などのルールを遵守しないことの問題を指摘した。浮棧橋の生簀での窃盗の問題も指摘し、犯人は特定しなかった。

I氏とJ氏は、マナーの悪い釣り人の釣り餌や釣具のポイ捨てによる悪臭や怪我の危険性、深夜や早朝の騒音、釣り人が防波堤から落下する危険があることを問題と指摘した。キャンプ場利用客にはテント設置などのルールを遵守しないことや騒音を問題と指摘した。また、どちらも含めた来訪者には生ごみなどのポイ捨てによる悪臭とそれを野生動物が食い荒らすことを問題と指摘した。

釣り人同士では、ごみのポイ捨てとトイレの有無、隣の釣り人との距離が近すぎることを問題と指摘した。

以上より、小島公園周辺の地域住民であるH氏、I氏、J氏がマナーの悪い釣り人とキャンプ場利用客に向けて問題の指摘をしたコンフリクトと、釣り人の間でマナーの悪い釣り人に向けて問題の指摘をしたコンフリクトが起こっていることが分かった。

(2) まとめ

本章では、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園におけるコンフリクトをステークホルダー図を用いて分析した。その結果、どの対象地でも地域住民がマナーの悪い釣り人に指摘した、港空間の公衆衛生を害する行為がコンフリクトを引き起こしていることが分かった。また漁業関係者がマナーの悪い釣り人に指摘した生業の妨げになる行為がコンフリクトを引き起こしていることが分かった。

釣り人の間で指摘されたレジャーとして楽しむ際の妨げとなる行為がコンフリクトを引き起こすことが分かった。

地域住民は、漁業に携わることや船を持つことによって港空間の利用の仕方が大きく異なるが、地域住民同士でのコンフリクトは野釜漁港以外では確認できなかった。野釜漁港ではF氏が指摘した船のエンジン音に対して指摘したが、F氏は野釜島出身ではなく、他の野釜島出身の地域住民は幼少期からこの環境で育ったためエンジン音について気にしていなかった。また、3章で示した通

り、地域住民同士は日常的な交流により強いコミュニティを形成していることから、互いに利用を認め合い、許容しているためコンフリクトが起こっていないと考えられる。

また、今回調査対象者としたステークホルダー以外にも、野釜漁港や小島公園ではコテージ利用客やキャンプ場利用客などの来訪者が存在した。いずれの来訪者も地域住民の生活と関わりがあり、このような条件下でもマナーを守らない利用客と地域住民の間では騒音や決められたルールを遵守しないことなどを地域住民が問題と指摘したコンフリクトが起こっていることが分かった。

6. おわりに

(1) 結論

本研究では、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園において釣りに着目した港空間におけるコンフリクトの実態を明らかにするために、空間分析とステークホルダー分析を行った。その結果、港空間は異なる利用目的を持った釣り人と地域住民が共存する場であり、それぞれの利用を妨げる行為によりコンフリクトが起こっていることが明らかになった。

(2) 今後の課題・展望

本研究では、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園において釣りに着目した港空間のコンフリクトの実態を明らかにすることができた。しかし、釣りは季節により狙える魚種が異なるため、港を訪れる釣り人の多さや釣り方など様々な要素が変わっていく。それらの季節性などを加味した実態把握のための調査を行っていく必要がある。

謝辞：本研究は、多くの方々のご協力の賜物である。記して感謝の意を表す。上天草役所、岩谷漁港、野釜漁港、小島公園の地域住民、釣り人等関係者の皆様にはヒアリング調査にご協力頂いた。地域創生Coデザイン研究所の皆様にはデータを提供して頂いた。

参考文献

- 1) 水産庁：(4)漁村の活性化
https://www.jfa.maff.go.jp/kikaku/wpaper/h28_h/trend/1/t1_2_4_4.html, 2023.2.2 参照
- 2) 水産庁：漁村活性化のあり方検討委員会、漁村活性化のあり方について
https://www.jfa.maff.go.jp/study/bosAi/pdf/0708_07.pdf
- 3) 国土交通省：釣り文化振興モデル港
https://www.mlit.go.jp/kowan/kowan_tk6_000032.html, 2023.1.27 参照

- 4) 玉置泰司, 棧敷孝浩, 高橋義文, 徳田幸憲: 溪流釣り場での禁漁区の解禁に対する遊漁者の支払意志額とその背景, 陸水学雑誌, 73巻1号p.17-22, 2012.
- 5) 鈴木一寛: 釣りガールの考察: 熱海女子釣り教室参加者アンケートの分析, 日本国際観光学会論文集, 20巻, 2013.
- 6) 笹尾和宏, 大庭哲治: 目撃者の意識からみた公共空間での特定利用形態に対する寛容性の探索的検討 スケートボードをケーススタディとした公共空間利活用, 都市計画論文集, 57巻3号, pp. 895-901, 2022.
- 7) 吉城秀治, 辰巳浩, 堤香代子, 糸永匠汰: 地域住民からみた住区内道路における道遊びに対する意識, 都市計画論文集, 54巻3号p.672-679, 2019.
- 8) 熊本県上天草市: 上天草市史大矢野町編4 近現代 天草の門, 近現代部会, 2007.
- 9) 環境省: 雲仙天草国立公園, <https://www.env.go.jp/park/unzen/> 2023.2.2 参照
- 10) 水産庁: 漁港一覧, 熊本県 https://www.jfa.maff.go.jp/j/gyoko_gyozyo/g_zyoho_bAko/gyoko_itiran/attach/pdf/sub81-4.pdf
- 11) 上天草市: 市港湾の一覧 city.kamiamakusa.kumamoto.jp/q/aview/317/741.html 2023.2.2 参照
- 12) 上天草市: 地域おこし協力隊 明瀬智博さん(上天草市全域) <https://www.city.kamiamakusa.kumamoto.jp/q/aview/484/14997.html> 2023.2.2 参照

A STUDY ON THE CONFLICT FOCUSING ON FISHING IN KAMI-AMAKUSA CITY

Masato TOYA and Naoto TANAKA

In recent years, fishing has become a popular leisure activity and a means of utilizing local resources. However, the lack of compliance with the rules and manners of anglers has become a chronic social problem. The purpose of this study was to clarify the actual situation of conflicts in the port space with a focus on fishing. We conducted an intersurvey and an action observation survey at Iwaya Fishing Port, Nogama Fishing Port, and Kojima Park, focusing on three stakeholders: anglers, local residents involved in the fishing industry, and local residents not involved in the fishing industry. The results revealed that the harbor space is a place where anglers and local residents coexist, and that conflicts occur due to actions that interfere with the use of each.